

説明文章の理解に及ぼす「読解枠組み」の影響に関する教育心理学的研究

著者	舩田 弘子
号	12
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	教 第116 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59136

ます だ ひろ こ
舛 田 弘 子

学 位 の 種 類 博士（教育学）
学 位 記 番 号 教 第 116 号
学位授与年月日 平成 21 年 3 月 4 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条 2 項該当

学 位 論 文 題 目 説明文章の理解に及ぼす「読解枠組み」の影響に
関する教育心理学的研究

論 文 審 査 委 員 （主査）
教 授 宇 野 忍 教 授 小野寺 淑 行
准教授 深 谷 優 子

＜論 文 内 容 の 要 旨＞

本論文は、社会科学的領域の説明文の読解に焦点を当て、学習者の読解を道徳的・社会的望ましさに偏向した文章理解に導く観点である道徳的読解スキーマ(Moral Reading Schema, MRS)を新たな読解枠組みとして提案し、主として大学生を対象にした一連の実験的研究によって、その活性化による不適切な読解の生起メカニズムを明らかにしている。

本論文は、第一部「総論」、第二部「各論」、第三部「総合考察および結論」の三部から構成されている。

第一部第 1 章では、文章からの学習に関連する先行研究がレビューされている。そして、概念的知識とストラテジーに関する知識を取りあげ、それらの要因が文章からの学習を促進する可能性と同時に、それらが不適切あるいは不完全である場合に生ずる不適切な読解の可能性、また読み手の持つ意見や信念が読解に妨害的な影響を与える可能性が述べられている。章の最後には、問題意識と 3 つの研究目的が設定されている。第 2 章では、不適切な読解及び読解枠組みに関連する先行研究として、概念的知識及びストラテジーに関する知識に関連する研究、自然科学領域、社会科学領域における文章からの学習研究、教育心理学における説明文の読解援助に関する研究がレビューされている。この中では、特に社会科学領域の文章読解上の特徴として、自成的に形

成された意見や信念の影響が大きいことが指摘されている。また、本論文において新たな読解枠組みとして提案された観点及び観点の一つである MRS の概念規定が、Kintsch(1994) の状況モデル論及びそのモデル論では十分に考慮されていない読解に関連する知識の不適切さや意見の影響に触れつつ、行われている。すなわち、観点とは「読解の際に読者が文章中のある内容に注目することで活性化されそれによって読解や解釈が方向づけられる枠組み」であり、また、MRS は文章の読解や解釈を道徳的・社会的望ましさに偏向したものに導く観点とされている。続く第 3 章では、不適切な読解と読解指導というテーマの下に、まず、国語教育における説明的文章の読解指導の目標が学習指導要領や PISA の読解力に関する該当部分を引用して述べられている。次に従来の読解指導法・指導論として、段落や接続語など表現の形式的特徴に着目し要約する形式操作主義的読みの指導と主観主義的読みの指導を取りあげ、後者が MRS 的な読解と関連していることを指摘している。

第二部では、筆者による 8 つの実験的研究とその結果が 3 分類して示されている。第 1 の分類である研究 (1)・(2)・(3) とその結果は、それぞれ第 4 章、第 5 章、第 6 章に述べられている。これらの研究では、学習者の知識・意見と読解上の諸問題との関連が追究されている。材料文は「結婚後の姓」について解説したものであり、被験者は専門学校や短期大学の 1～2 年生であった。材料文とした社会科学領域の文章では、自然科学領域の文章とは異なり、正しい法則や知識よりはむしろ、その個人の意見や信念、特に生活経験の中で自成的に作り上げたそれらの影響が大きいことが予想された。その結果、予想と合致して、①社会科学領域の説明的文章の読解に関して、特に題材に対して受容的か否かに関わる意見の強固さが影響していること、②それは、問いに対して学習者が自らの知識や意見を再構成して提示する必要がある「生産的問題解決の課題」において特に顕著に観察されること、の 2 点が明らかにされた。

第 2 の分類である研究 (4)・(5)・(6)・(7) とその結果は、第 7 章、第 8 章、第 9 章、第 10 章に述べられている。これらの 4 つの研究は、学習者の意見、とりわけ特定の「観点」がどのように読解に影響するのか、また「道徳的読解スキーマ」が読解に妨害的な影響を与えるか等の問題を追及したものである。いずれの研究も短大 1 年生、大学 1・2 年生を被験者にし、社会科学的な領域の説明文を材料文として実験を行った。その結果、①材料文への読者の着目には、「データの軽視・解釈及びまとめの重視」といった偏りが生じていること《研究 (4)》、②その偏りは、文章内容や接続関係を無視した不適切な読解に結びつく「観点」を形成する可能性があること《研究 (5)》、③ MRS の活性化は文章の形式的側面を軽視することと関連すること《研究 (6)》、④ MRS の活性化は様々な文章において観察されるが、文章により活性化の程度が異なる、即ち文章依存性がある可能性が示されたこと《研究 (7)》が明らかになった。これらの結果から、Kintsch(1994) あるいは PISA 型の読解リテラシーで想定されている、「階層的な読解モデル」の妥当性に限定が加え

られる必要があることが指摘された。

第三の分類である研究(8)とその結果は、第11章に述べられている。研究(8)では、MRSの活性化を抑制することを意図した教授活動が試みられた。大学生1,2年生を主とする学習者に対し、待遇表現に関する文章の読解を課し、文章の形式的側面を強調して読解の援助を試みた授業実験を2種類行った。その結果、①今回の教示のみでは不十分であり、文章の形式的側面のより明確な理解のためには、学習者の積極的・主体的な活動が必要である可能性が示されたこと、②文章の形式的側面の理解が適切に行われているほど、MRSの活性化が抑制されている可能性が再現されたこと、が明らかにされた。

第三部では、まず第12章において、実験的研究の知見が整理された。次いで13章では、観点とりわけMRSによって読解上生じる問題点が改めて論じられた。読者は、MRSの影響によって、自分に親和的な一般的な理解を引き出すといった、不適切な読解ストラテジーを用いている可能性が示されたことから、適切な読解ストラテジーを獲得し、活用することの重要性が改めて示された。また、MRS的な考え方の表明は社会的に望ましい価値の表現であるため、反論され難く、正の強化が付随しやすいことや国語教育の中で高く評価されることがあることなどから、このMRS的な考え方は読者の記憶に残りやすく、その表明が促進される可能性が示された。第14章では、教育心理学の立場から、現時点における読解研究の方向性と読解指導についての提案が試みられた。

＜論文審査の結果の要旨＞

教育心理学分野においては、1960年代の Ausbel.D.P の有意味受容学習理論の提唱以来、文章の読解研究や文章からの学習研究が数多くなされてきた。それらの研究の結果として、我々が文章を読み、理解し、新たな知識や意味を獲得する際に、我々の認知構造に格納された既有知識が重要な役割を果たすことが認識されている。ただし、仮定された認知構造内の既有知識が不十分なものである可能性や誤っている可能性、さらにそれが誤読や不十分な読解を引き起こす可能性については、それが自然科学領域での教授学習研究における誤概念の研究や概念変容の研究で最近になって明らかにされてきたこともあり、読みによる学習研究ではまだ十分に反映されていないように思われる。

こうした状況にあつて、本論文は、社会科学的な領域の事象を内容とする説明文の読みによる学習事態を取りあげ、新たな読解枠組みとして「観点」という概念を提唱し、とりわけ学習者の読解を道徳的・社会的望ましさに偏向した文章理解に導く観点として「道徳的読解スキーマ(Moral

Reading Schema、MRS)」を新たな読解枠組みとして提案し、主として大学生を対象にした一連の実験的研究によって、その活性化による不適切な読解の生起メカニズムを明らかにした点は、従来の読解研究の知見に新たな知見を加えるのに成功しているといえ、評価できる。また、援助活動の結果は十分ではなかったが、読解指導にも援用できる提案がされていることは、国語科の指導や大学における初年次教育など実践分野にも適用できる可能性を示しており、評価できる。

本論文の中で示された研究成果は、主として大学1・2年生が読み手である実験的研究によっており、他世代の読み手にまで一般化できることかなど、今後検討する課題もあるが、当該研究領域に新たな知見を加えたこと、教育実践にもつながる研究成果を示し得たことが評価できる。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として合格と認める。